

國學院大學学術情報リポジトリ

ディスカッション

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上山, 和雄, 手塚, 雄太, 高久, 舞 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001109

《ディスカッション》

【林】伊藤毅先生、渋谷学のありようについて核心を突く質問をいただきありがとうございます。続きまして、第一部で基調報告をされた先生方にも参加いただき、ディスカッションを始めさせていただきます。

コメンテーターのお二人の先生からいただいた問題提起を、私の方で三つにまとめて質問させていただきます。

質問① 渋谷の範囲、トポスをどのように考えるか

まず「渋谷とは何か」についての質問ですが、二つに分けさせていただきます。一つは、これまで渋谷学では、渋谷を論じる場合には渋谷駅周辺の半径数百メートルの狭い範囲を主に研究の対象にしてきましたが、今後の渋谷学において、渋谷を論じる場合、この範囲のままで果たしてよいのか、あるいはもっと広い空間的な広がりも対象にするかなのでしょうか。

もう一つは、伊藤先生からご質問がありましたように、渋谷というトポス——場あるいは空間——について、それぞれのご専門の立場からどのようにお考えなのかを、手塚先生からお答えいただきたいと思います。

【手塚】手塚でございます。渋谷の範囲をどのように考えるかという問題ですが、究極的には渋谷駅周辺のあたりになると思うのですが、私はそこだけを分析すればいいわけではないと思っています。

一つには、これは二番目の議論と関わることでですけども、渋谷学に関わってくれる人を増やすというか、多くの

人に関わってもらうためには、あまり限定的に範囲を考えることはよくないと思うところがあります。それぞれの学問領域の特性があつて、駅数百メートルだけを対象とした場合には、学問分野によっては研究のしようがない。歴史学も史料的に難しいということもあるかもしれませんが、究極的には駅周辺のエリアを中心とするのは、私はそれでいいと思うのですが、関わってくれる人の広がりや欠く面が出てきてしまうのではないかと、現実的な問題があるように思います。

また、一九七〇年代以降に成立する東京を代表する渋谷では、住民票を置かない人も重要な渋谷の一員となります。加えて、渋谷らしさが駅数百メートルを超えて多くの人々に共有されたり、あるいはイメージされたりすることがありますので、渋谷の範囲はもう少し可変的に考えてもいいのではないかなと思います。その場合、行政区画としての渋谷区の範囲は、それなりに意味があると思っています。何よりも、ある一定の場所が渋谷という名前で括られるからです。

『翔んで埼玉』（東映、二〇一九〔平成三二〕年公開）という映画があつたことを覚えている方もいるかと思いますが、あれは埼玉県というものを、あまりいい言葉ではありませんが、「面白おかしく」「イじる」映画だったと思います。なぜあんなに面白がられたのか、あるいは映画がある程度ヒットしたのかは、埼玉県という区画が一定の共有する（された）イメージを持っていると認識する人が多かったからだと思います。埼玉県は明治の初めに成立したわけですから、江戸時代までの歴史を振り返れば特に統一性もないエリアであるのに、そのエリアを同じイメージで括り、「翔んで埼玉」ではそのエリアを面白おかしく描き、それを面白く受け取る人々もいた。そういうことを考えれば、行政区画が持つ意味を考えることの意義は大きいし、また行政区画を単位として政策がなされる以上、それはそれで重要ではないかと思っています。

もう一つの「渋谷はそもそもどういう場所なのか」という質問については、クライマックスの質問のように思うので、どうお答えすればいいのかなと一週間ぐらいつと考えておりました。

私事ですけれども、私は、今、一年間の時間（二〇二一〔令和三〕年四月～二〇二二〔令和四〕年三月）で在外派遣研究、他大学でいうところのサバティカルを大学からいただいたて、ヨーロッパのベルギー王国に滞在しております。コロナ禍なのでいろいろと気をつけながら、ベルギーをはじめとしたヨーロッパの様々なまちを訪ねていると、やはりヨーロッパの都市にある広場というものが日本にはないのだなと思います。言葉で広場といえ、いやいや日本にも何とか広場みたいなものがいくらかでもあるじゃないか」と思われる方もいるかと思うので、私が今ここでいっている広場とは何かということ、伊藤先生のご専門とされる分野だと思いますが、少しご紹介します。

今（シンポジウム当日）、私はKULルーヴェン、ルーヴェン大学（Katholieke Universiteit Leuven）の日本学科におります。「ルーヴェン（Leuven）」は、この大学が立地している都市の名前です。【写真1】に映っている建物は、ルーヴェン大学の中央図書館です。図書館の前にこういった広場が広がっています。周りには銀行やお店、カフェ、テラスがあつて、おじいさんやおばあさんが団らん、談笑していたり、あるいは学生が話していたりします。何にもない日はこういう感じですが、金曜日や土曜日には【写真2】のように図書館前の広場でいろいろな人が思い思いのお店を出して、マーケットが開かれます。

それ以外のときは何をやっているかというと、たとえば、イベントの会場になります。【写真3】はビーチバレーの大会が開かれていたときの光景です。またあるときは、【写真4】や【写真5】のように、移動式の遊園地がやってきました。こうした広場はヨーロッパのあちこちにありまして、そうした広場を巡る移動式遊園地があるわけです。さらには、自転車のロードレースの国際大会（UCIロード世界選手権）が開かれていて、その会場の一つになっ



【写真 1】 KUルーヴェン大学中央図書館
(撮影：手塚雄太、ベルギー王国ルーヴェン、2021 年)



【写真 2】 KUルーヴェン大学中央図書館前広場
(撮影：手塚雄太、ベルギー王国ルーヴェン、2021 年)



【写真 3】 ビーチバレーの大会
(撮影：手塚雄太、ベルギー王国ルーヴェン、2021 年)



【写真 4】 移動式遊園地
(撮影：手塚雄太、ベルギー王国ルーヴェン、2021 年)



【写真 5】 移動式遊園地
(撮影：手塚雄太、ベルギー王国ルーヴェン、2021 年)



【写真 6】 自転車のロードレース国際大会
(撮影：手塚雄太、ベルギー王国ルーヴェン、2021 年)



【写真 7】 グラン＝プラスの広場
(撮影：手塚雄太、ベルギー王国ブリュッセル、2021 年)



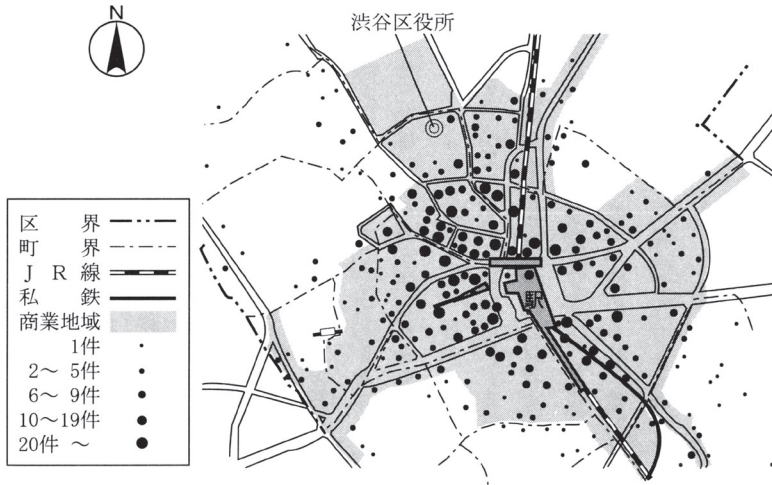
【写真 8】 ブリュッセル自由大学の卒業式
(撮影：手塚雄太、ベルギー王国ブリュッセル、2021 年)

ていた様子を写したのが【写真6】です。奥にルーヴエン大学図書館の建物が見えています。今まで見ていただいたのはルーヴエンですが、ブリュッセルのグラン＝プラス (Grand-Place/ Grote Markt) という観光名所の広場 (【写真7】) では、多くの人々が集まり、周りのカフェやレストランにいろいろな人がいて、思い思いに時間を過ごしていました。一方、別の機会に撮影した【写真8】を見ていただくと、この広場ではブリュッセル自由大学 (Université Libre de Bruxelles/ Vrije Universiteit Brussel) の卒業式をやっています。卒業生と父兄の方が並んで卒業式が行なわれています。私が今話している「広場」とは、日本にある何とか広場と名づけられたに過ぎない空間ではなくて、まさにこうした空間のことを指しています。

基本的にこの種の広場は、日本のまちには無いと思います。しかし、渋谷は一九七〇年代以降、徐々に人々が集う広場的な機能を有する空間になってきたのではないかと思います。もちろん、日本においても近代以降にこうした広場をつくるという発想はありました。都市計画家が広場をつくろうとしますが、なかなかうまく定着しませんでした。たぶん、ヨーロッパではそれぞれの地域の歴史に根ざして、【写真1〜8】で見ていただいたような空間ができあがったわけなので、いきなり持ち込んでもうまくいかないのだと思います。ここから、今の渋谷をひと言で表現すれば、「自然発生的に出てきた広場的機能を持った空間」といえるかなと思ったところです。

【林】手塚先生、ありがとうございます。続きまして、高久先生お願いいたします。

【高久】まず、渋谷の地域的広がりに関するご質問ですが、民俗学の視点からすれば、アクターによって渋谷の示す範囲は異なるということを指摘できるかと思います。もちろん、渋谷駅周辺七〇〇メートルの範囲も渋谷ですけれども、



【図1】 渋谷駅周辺「渋谷店」分布図

＊ 長野隆之「渋谷の地名認識」『渋谷学叢書 1 渋谷をくらす—渋谷民俗誌のこころみ—』雄山閣、2010 年より転載

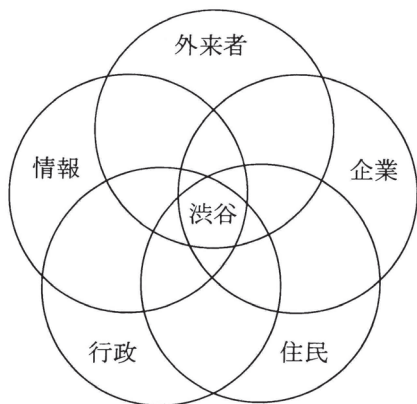
その中に何人くらい住民がいるのかというと、非常に少ないわけです。

私事ですけれども、私は渋谷から徒歩で一五分、二〇分くらいのところにある実家に住んでいまして、行政区画としては目黒区となりますが、「地元はどこか」と訊かれたら「渋谷」と答えていました。というのも、どこが目的地でも結局は渋谷駅に出ますので、直接駅歩いて行く、もしくは自転車で行ってしまった方が早いからです。同様に、一番近い駅が渋谷である目黒区在住の友人たちに訊いても、細かい説明が面倒くさいから渋谷と答えてしまっているといっています。あとは渋谷区の中でも、南平台であったりとか、猿楽町であったりとか、代官山駅に実際には近いところではありますが、そこに住んでいる私の友人たちも「地元は渋谷」と答えている人が多いです。このように、住民にとつての渋谷は、半径七〇〇メートルの範囲内とは限らないと考えております。次に、渋谷という範囲に関する質問ですが、実際に渋谷研究会（倉石忠彦の大学院ゼミ生が主要メンバーとなって

発足した都市民俗研究会において、渋谷の民俗誌作成を目的として立ち上げられたワーキンググループ）でも、どこまでの範囲のお店が店名に「渋谷」を用いているのかを調べた研究があります。長野隆之先生は、**【図1】**のような地図をつくって、こうした店の分布が山手線を挟んで西側に広く濃密に見られ、山手線の東側や首都高の南側には分布が薄いことを指摘しています（長野隆之「渋谷の地名認識」國學院大學渋谷学研究会・倉石忠彦編著『渋谷学叢書1 渋谷をくらす―渋谷民俗誌のこころみ―』雄山閣、二〇一〇〔平成二二〕年）。そのような形で渋谷の範囲を定義することもできます。

このことと関連して、行政範囲としての渋谷は、やはり渋谷区となりますが、一方で企業にとつての渋谷は、「うちの会社は渋谷にある」といいながらも、実は恵比寿に近いという事例があります。同様に、外来者もまた、渋谷駅を中心とする半径七〇〇メートルの範囲を「渋谷」と考えていて、これが「イメージの渋谷」だといえます。この外来者による「イメージの渋谷」の範囲を議論していく必要があるように思います（高久舞「イメージと現実の渋谷―外来者と生活者からみる渋谷の空間―」國學院大學渋谷学研究会・上山和雄編著『渋谷学叢書5 渋谷にぎわい空間を科学する』雄山閣、二〇一七〔平成二九〕年）。もともと、分析指標によつて渋谷の範囲は異なっていますので、渋谷学は多様な分析指標から渋谷の範囲を考えていかなければならないでしょう。

それから、渋谷というトポスについては、私も手塚先生と同様、非常に悩みまして、悩んだ挙句、「我が街、渋谷」というひと言を思いつきました。これは、誰もが「私の渋谷」といえてしまうという意味です。民俗学の立場からは、イメージと現実の部分、イメージで捉えている外来者と現実的な渋谷の生活者、それぞれの立場で目指す渋谷が異なっていることを指摘できます（前掲「イメージと現実の渋谷」）。この立場とは、**【図2】**で倉石忠彦先生（國學院大學名誉教授）が表したような「外来者、企業、情報、行政、住民」という立場を指します（倉石忠彦「都市の伝承と文化」『都市民俗研究』第一一〇号、都市民俗学研究会、二〇〇五〔平成一七〕年）。それぞれの立場で渋谷をどう考え、そしてどのよう



【図2】 渋谷の構成

* 倉石忠彦「都市の伝承と文化」『都市民俗研究』第11号、2005年より転載

になって欲しいと考えているのかは違うわけです。これは、民俗学の立場から分析してきた一つの成果とも思いますが、だからこそ渋谷は面白いともいえるのかなと思っています。

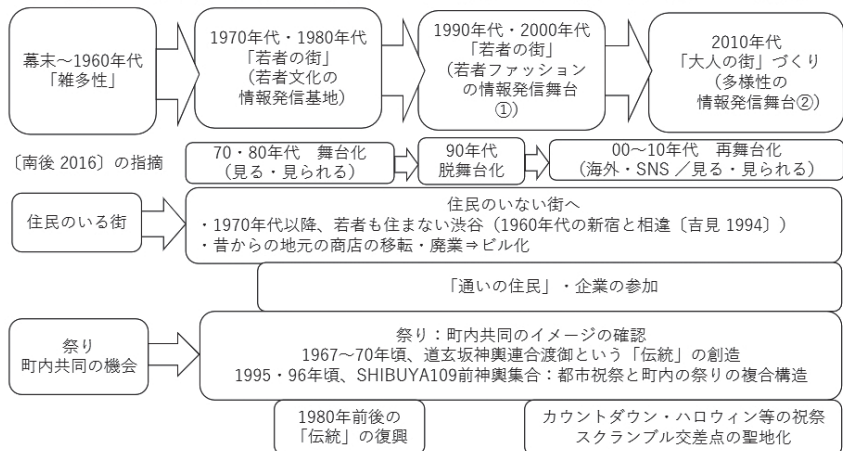
【林】どうもありがとうございました。続きまして、秋野先生お願いいたします。

【秋野】國學院大學神道文化学部兼任講師の秋野です。橋元先生が提示された「渋谷の変貌モデル」を図式化し、それに渋谷の宗教に関わる戦後の流れを加えて【図3】と【図4】に示しま

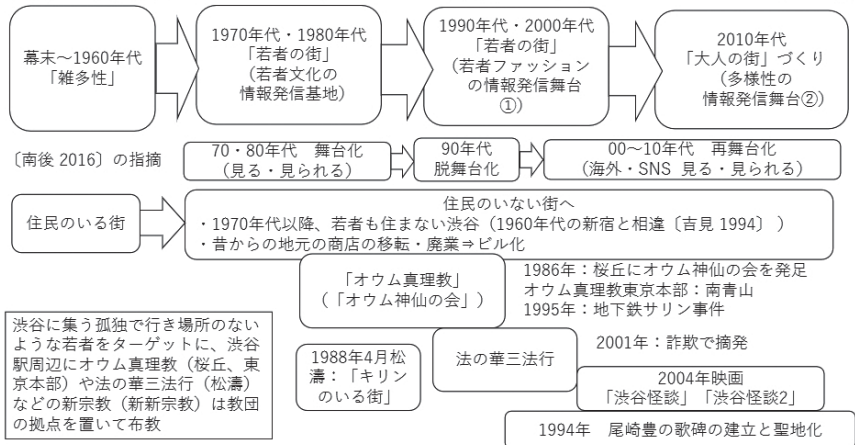
した。橋元先生の変貌モデルは、宗教社会学から見てもおおよそ当てはまるのではないかと思います。

渋谷はどこだという質問ですが、まず地域社会と祭りの視点から見ておきます。狭義の渋谷とは、私たちが「渋谷」といったときにイメージできる、ハチ公像やスクランブル交差点、SHIBUYA109や渋谷センター街などがある渋谷駅周辺の半径七〇メートル以内、住所で見ると道玄坂一丁目や二丁目のあたりと考えられます。このエリアは商業地域で住民がほとんどいないまちです。一九六〇年代には、一階にお店があって二階に従業員が住んでいるようなところでしたが、だんだん高層化していつて、魚屋を畳んでビルにして世田谷あたりの郊外に住み、渋谷にテナントを持つだけの「住民のいない街」になります。そして、郊外に住んで渋谷のビルに通う「通いの住民」が生まれました。こうした「通いの住民」が、道玄坂一丁目や二丁目の祭りを運営していくことになります。かつては、お店

「住民のいる街」から「住民のいない街」へ、再び「住民のいる街」へ



若者と宗教文化：イメージ化される「渋谷」で希求される「リアル」な場



【図3】(上段) 戦後渋谷の地域社会の動態 (作成：秋野淳一)

【図4】(下段) 戦後渋谷の若者と宗教文化 (作成：秋野淳一)

* 吉見俊哉『メディア時代の文化社会学』新曜社、1994年

** 南後由和『商業施設に埋蔵された「日本的広場」の行方』『商業空間は何の夢を見たか 1960～2010年代の都市と建築』平凡社、2016年

の二階に住んでいる従業員が祭りで神輿を担いでいましたが、「住民がいない街」となり、神輿の巡幸を維持するためには、神輿同好会や様々なネットワークを通じて集う人たちの参加、東急不動産や銀行などの「企業の参加」によって祭りを維持する形に変化しました。この「通いの住民」の存在や「企業の参加」などから、渋谷はどこなのかといえば、手塚先生と高久先生とも共通していますが、渋谷駅周辺の半径七〇〇メートルだけではなく、広義には周辺エリアとの関係を視野に入れる必要があるといえます。

つまり、「住民のいない街」の祭りの実態から、多様な地域社会に通う人たちの存在が浮き彫りとなり、そうした意味で渋谷の範囲はもっと広がるのかもしれませんが。少なくとも渋谷の範囲を考える上で、狭義の渋谷と、周辺エリアを含めた広義の渋谷の両面を見ていく必要があるといえます。

次に、若者と渋谷の視点から見ておきます。社会学者の吉見俊哉先生によれば、一九六〇年代の新宿と一九七〇年代以降の渋谷の違いは何かというと、新宿は裏街に若者が住んでいるのに対して、渋谷の後背地の松濤や南平台などは家賃が高くて住めなくて、実は若者の住まないまちということです（吉見俊哉『メディア時代の文化社会学』新曜社、一九九四〔平成六〕年）。近くに住む場所がなく、孤独で行き場のない若者をターゲットにしたと考えられる反社会的な教団の施設が渋谷駅周辺の半径七〇〇メートルの外側にできました。たとえば、地下鉄サリン事件を起こしたオウム真理教は、一九八六（昭和六一）年に前身となるオウム神仙の会が桜丘のアパートの一室で産声をあげ、教団の東京本部が南青山にできました。また、二〇〇〇（平成一二）年に詐欺事件で摘発された法の華三法行は、松濤の松濤美術館の周りの土地を、松濤で自営業を営む古くからの住民が転出した時期に買い占め、そこに複数の教団施設を建てました。

一方、表参道寄りの渋谷クロスタワーの三階テラスには、歌手・尾崎豊（一九六五〔昭和四〇〕年～一九九二〔平成四〕

年)の歌碑(モニュメント)があります。尾崎が青山学院高等部の学生時代に夕陽を見ていた歩道橋があるところで、デビュー曲「十七歳の地図」(『十七歳の地図』CBSソニー、一九八三(昭和五八)年収録)の歌詞に出てくる知る人ぞ知る場所です。その壁に尾崎の死後、尾崎宛のメッセージが自発的に書き込まれ、尾崎の三回忌の一九九四(平成六)年に尾崎豊の歌碑ができました。歌碑ができることによって尾崎の命日や誕生日などを中心に、全国から集う若者が一年を通じて絶えない、いわば「聖地」となっていました(秋野淳「尾崎豊の歌碑に集う人たち―東京渋谷の「聖地巡礼」―『都市民俗研究』第二五号、二〇二〇(令和二年)」。若者と渋谷の視点から見えてくるのは、直接的には狭義の渋谷と後背地との関係です。また、都市の闇の問題にも関わりますが、渋谷は光と影を持った存在でもあることです。

さらに範囲を広げて考えると、原宿の明治神宮の存在も重要です。これは、『渋谷学叢書3 渋谷の神々』(國學院大學研究開発推進センター渋谷学研究会・石井研士編著、雄山閣、二〇一三(平成二五)年)に収録されている藤田大誠先生の「神社から見た渋谷」や石井研士先生の「はじめに」において、明治神宮が渋谷に与えた影響が少なくないことが指摘されています。いわば「広域渋谷圏」と狭義の渋谷との関係も重要といえます。

広域渋谷圏という意味では、東京ジャーミイ・デイナーナトルコ文化センターというイスラームのモスクが代々木上原にあります。イスラームは、実は世界中で信者数を伸ばしています。渋谷の光と影という意味では、渋谷という都市とイスラームのモスクとの関係にも目を向ける必要があるのかもしれませんが。以上、宗教社会学的な視点から渋谷の範囲について考えてきましたが、私たちが「渋谷」といったとき思い浮かべることができるイメージとしての「渋谷」、いいかえれば、情報化の舞台である渋谷駅周辺を指す狭義の渋谷とともに周辺のエリアとの関係も含めて、その中でどこが渋谷で、どこからが渋谷ではないのかということを具体的に詰めていったほうがいいのではないかなと思っています。

最後に、トポスとしての渋谷については、林先生の振り返りの中にもありましたように、渋谷の特徴をひと言でいえば、「立体型」と「平面型」の「結集のための核」を併せ持ったストリートの文化」といえます。ただ、今後の再開発でストリートの人通りが少なくなると、こうした構造が変わっていく可能性もあります。しかし、渋谷は光と影を併せ持った存在であり、両者をつなぐ「立体型」と「平面型」の「結集のための核」がある。この「結集のための核」の存在によって変わりにくい渋谷も維持されていると考えられ、そこに宗教社会学から見たトポスとしての渋谷の特徴があるといえます。

【林】 秋野先生どうもありがとうございます。それでは、上山先生からもご発言をお願いいたします。

【上山】 上山でございます。皆さんからのお話を聞いていて、反省することしきりでございます。伊藤先生から、二〇年間渋谷学をやってきてどのように変わったのかというご質問がございました。渋谷学をやってきて、どのようなところに成果や影響があったのかを改めて考えると、渋谷は地域的な広がりや政策などいろいろな影響を最も受けやすい地域だったと思います。どこの地域もそのような影響を受けますが、渋谷はそのような影響を最も強く受けてダイナミックに変貌を遂げてきたのです。これは今後も継続するような感触を持ちます。

渋谷学は、当初は渋谷駅周辺を中心にして、渋谷に表れてきた現象は他と異なっているから、それを研究すれば〈学〉たり得ると考えてきたわけです。それから、その変化をもたらす様々な影響を研究せざるを得ないため、渋谷は狭い意味での現象を中心に研究するような側面と、それらの現象をもたらす様々な要因を明らかにしていく側面の両方を持ったものとして今後も続いていくのであらうと考えております。

ここで一つの反省なのですが、お二人のコメントーターのお話に共通するところがございまして、それは、〈学〉といっているけれども、〈学〉としてのまとまりが無いのではないかとというご批判です。たしかに、今日登壇していただきました三人の若い方々、あるいはそれ以外の方々にもお願いをして、それぞれの分野で渋谷学を続けていたかどうかというのが私の務めだと思っております。〈学〉としてのまとまりをつけていく努力を怠ってきたという反省がございます。そのことは、これからの渋谷学を担っていただく方々にお願したいと思っております。

これからの渋谷学は、今まで行なってきた渋谷学をきちんとまとめるといふことと、もう一つは、もっと狭く、一つのまちを取り上げてどうだったのかを追究していくということ、それに対してもっと広がりを持って展開していった欲しいということを感じて持っております。

【林】上山先生、どうもありがとうございました。先生には渋谷学が将来進むべき方向についてまでご発言をいただきました。

質問② 渋谷の変貌とは具体的に何を指し、渋谷の後はどのようなのか

続きまして、二つ目の質問です。先生方が論じられています「渋谷の変貌」とは、具体的に何から何への変貌をお考えなのでしょう。そして、どのような渋谷らしさに今後変貌していくのか。そうした場合にコロナ終息後、あるいは二〇二七（令和九）年に渋谷スクランブルスクエア中央棟・西棟の開業をもって一〇〇年に一度の大規模な再開発を終えた後、渋谷はどうなっていくとお考えでしょうか。それについてまず、手塚先生からご発言をお願いいたします。

【手塚】渋谷の変貌についてですが、私だけ時間の幅の取り方が長いのだと思います。秋野先生や高久先生は戦後で時間軸を取っていますが、私は江戸時代ぐらいから時間軸を取って話しておりました。そうしたことから大雑把に言えば、私の報告にもあったように、戦前期においては「住みよいまち渋谷」というのが渋谷だったと思います。先程のいい方をすれば、広場的空間の渋谷ができていく時代というのが戦後であって、それが今は、渋谷ハロウィンとかも典型的だと思いますが、高久先生のご報告にあったような空間になっているのだろうと思います。

では、この後どうなるのかを考えていくことは結構難しいことだと思います。秋野先生のご発言にもありましたが、超高層ビルがいつぱいできて、そこに人が自然発生的に集まって何かが起きたり、いろいろなイベントが開かれるのだろうか、今後このまちは本当に維持できるのだろうかという懸念がややあるように見えます。コロナの影響があつて、人はなかなか集まりにくいので、そういった面から変化を強いられる、迫られることもあるのかもしれないと思います。一方で、人と会いたい、一緒に時間を過ごしたいという欲求が人間にあることは、こちら（ベルギー）に滞在してコロナ前に戻ったかのような活動をされている現地の人々の姿を見ると、やはりあるとわかります。もしかしたら、コロナの影響がまちに与える影響はそこまでではないのかもしれない。ただ、渋谷にとっては二〇二七年以降に再開発が完結し、数多くの超高層ビルが林立するなか、あるいはジェントリフィケーション（Gentrification：再開発によって生じる都市の高級化）が進んでいくと、渋谷が多様な人を惹きつけるだけの魅力を持てていくのが難しい局面もでてくるのかもしれないと見ております。以上です。

【林】手塚先生ありがとうございました。続きまして、高久先生にご発言をお願いいたします。

【高久】渋谷の変貌とその推移ということですが、手塚先生がおっしゃったように、戦前から一九五〇年代ぐらいまで、まちの形成期であって、いつてしまえば生活者の顔が見える時期でした。たとえば、藤田佳世（一九一二〔明治四五〕年―二〇〇三〔平成一五〕年）とか、渋谷に住む人たちの資料からはいろいろと見えてくるものがありました。聞き書き調査をしても渋谷での生活のお話を聞くことができましたが、だんだんと見えなくなってきたのが現在です。上山先生もご指摘されているように、一九七〇年代は「高度経済成長の果実により内需拡大が図られ、団塊の世代が消費者の中心的世代となっていく時代」、一九八〇年代は「渋谷を拠点に西武や東急が発信する消費文化の最盛期」、それから九〇年代以降になると「バブル崩壊、西武セゾングループの解体により、「若者の街ではなく若者を対象とした企業の街」であることが若者自体に認識され、「西武セゾングループによって組み立てられた世界が全部壊れた、やはり唯の皿だった」ことが明らかになった時代でした（上山和雄「首都圏整備と東京、渋谷」國學院大學研究開発推進センター渋谷学研究會・田原裕子編著『渋谷学叢書4 渋谷らしさの構築』雄山閣、二〇一五〔平成二七〕年）。そして、二〇〇〇年代後半から現在に至っては、メディアを媒介して「渋谷」が広がっているように思います（高久舞「民俗から見た渋谷」國學院大學研究開発推進センター渋谷学研究會編『別冊ブックレット渋谷学』國學院大學研究開発推進センター、二〇二一〔令和三〕年）。

では、その後がどうなっていくのかというと、イメージと現実が乖離していく渋谷になっていくのではないかと思います。たとえば、二〇二一（令和三）年一月三十一日の渋谷のハロウィンは、ニュースでご覧になった方もいらっしゃると思いますが、コロナ禍でありながら非常に多くの人が来て仮装していました。その一方では、「バーチャル渋谷ハロウィーンフェス」というものがあり、現実には華やかで装飾めいた渋谷でも、仮想空間には人がいない。今後は、これらがどのように習合していくのか、あるいは関係を持っていくのか、あるいは交わることがないのかを

見ていく必要があるかなと思います。

もう一つ面白い展開であるとか関心を持っているのが、「イメージの渋谷」に行政や企業が乗っていく様子です。たとえば、正月のカウントダウンに自然発生的にスクランブル交差点に人が集まってくると、これまでは行政側が警察等を介入させて取り締まっていました。しかし、近年は渋谷区が主催するカウントダウンイベントになっています（二〇二〇〔令和二〕年のコロナ禍より中止）。ハロウィンも同様に集まる人々を取り締まっていましたが、集まる人々のために道路を封鎖して歩行者天国のような場を解放しています。

現在は、再開発、つまり企業によってつくられた渋谷という状況が再び起きています。再開発が繰り返されていくのであれば、またつくられた渋谷からの脱却が見えてくるのではないかなと期待しております。ただ、一九九〇年代から二〇〇〇年代前半と現在においては様々なことが異なっています。再開発後、渋谷がどうなるのかは本当にわかりませんが、イメージの渋谷、もしくは企業が考えているような渋谷に現実の人たちがどのように来るのでしょうか。これは悲観的なものではなく、このせめぎ合いが渋谷の面白さや文化を生み出していくものだと思いますので、楽しみにしております。

【林】ありがとうございます。続きまして、秋野先生にご発言をお願いいたします。

【秋野】渋谷の変貌については先程のリプライ（前掲【図3】、【図4】参照）でも見ましたが、渋谷駅周辺に関していえば、「住民のいる街」から「住民のいない街」、「通いの住民の街」へ変化しました。二〇二七（令和九）年の桜丘の再開発後には、再び「住民のいる街」へと変わっていくと考えられます。

今後のことは再開発が終わってみたいとわかりませんが、現状では祭りは町内の住民が少なくなり、通いの住民が運営する形に変化し、神輿の担ぎ手を外から呼んで、町内共同のイメージを図る場に変わってきました。つまり、実態としての町内共同の場から、そのイメージづくりの場に変わってきました。そして道玄坂を連合渡御したり、SHIBUYA 109前に神輿を集合させたりという、にぎわいの場の魅力もプラスに働き、地域外の担ぎ手が集まり、祭りを継続して町内共同のイメージも維持しています。結果的には企業も含め、多様な地域社会に通う人たちも参加し、地域の多様なアクターが顔を合わせる一つの機会となり、防災・減災にも役立っているという変化が見えます。

一九七〇年代・八〇年代の公園通りは、吉見俊哉先生が『都市のドラマトゥルギー』（弘文堂、一九八七〔昭和六二〕年、二〇〇八〔平成二〇〕年に河出書房新社より文庫化）で明らかにしているように、まちを歩き交う人たちのリアルな「見る・見られる」の関係が大きな役割を持っていましたが、「見る・見られる」の関係がリアルのものだけでなく、だんだんとメディアを通じて渋谷がイメージ化されていく中でバーチャル化していく。若者が渋谷に出てきても、先程いきましたように行き場所がない。リアルなつながりが欲しい。そこに、オウム真理教や法の華三法行といった新宗教が布教活動して、それに惹かれていく人がある。ただそれは、つながっている者同士、信者同士の密接な横のつながりがあるのではなく、おそらく教祖と信者という縦のつながりです。さらに二〇〇〇年代以降は海外からの影響もあり、渋谷が観光都市、国際都市となっていく。そうした中でICT (Information and Communication Technology: 情報通信技術) を介した緩やかなつながりの場が生まれ、ハロウィーンには多くの若者が集まってくるわけです。ただし、ちょうど事件がありました。京王線の列車刺傷事件（二〇二一〔令和三〕年）の犯人は、渋谷のハロウィーンに行ってから犯行に及んだように、渋谷は危うさも併せ持っている。そうした意味で「大人の街」づくりが進む中で、渋谷に集う「若者たちの居場所」をどうするかというのは、実は大きな課題です。

渋谷にはこうした光と影の部分があり、この両面に関わる形で非合理的な存在、宗教文化というものがあるのかもしれない。コロナ禍においては、たとえば、二〇二一（令和三）年の明治神宮の初詣は、感染対策の一環として大晦日から元旦への夜間参拝は中止しましたが、けっして少なくない参拝者は正月三が日や、正月時期をずらした分散参拝でお参りに訪れるというケースも見られました。明治神宮が多くの人々の支えになっている様子が見て取れるわけです。国際的な観光都市として、渋谷はおそらくコロナ後も注目されるでしょうし、海外からはインバウンドの需要があることでしょう。しかし、現状では、孤独な若者の居場所がない。また、宗教社会学からの教訓としては、反社会的な新しい新宗教（「新新宗教」という呼び方もある）の教団がICTを介して若者たちを取り込んでいくかもしれないことを考えると、犯罪につながるかもしれないので危険です。そういう意味では、たとえば、渋谷センター街の中に相談者（あるいはカウンセラー）が常駐するようなカフェを設置するなど、迷える若者の支えとなるような立体型の「結集のための核」の形成が必要と考えます。そうした形で光と影を包摂する若者の居場所がある「大人の街」へと変わっていった方が今後はいいのではないのでしょうか。

それから、渋谷駅周辺の再開発によってアーバンコア（Urban Core・エレベーターやエスカレーターなどを活用しつつ、地下とデッキ、地上を結ぶ多層的な歩行者導線）などが整備され、地下階の通路と上層階のデッキを行き交うような人の流れが生まれ、地上のストリート歩きがなくなった場合にどうするのかは一つの課題です。ストリートで人を立ち止まらせるためにモニュメントをつくってきたという渋谷の戦後の歴史があるので、まちの記憶や歴史というものを思い起こさせるような装置をどのように担保していくのか。東急さんが東急東横線渋谷駅のモニュメントを「鉄道の記憶」としてつくった例もありますが、こうした問題を考えなくてはいけません。

もちろん、そこには渋谷駅周辺のコミュニティ、地域社会をどのように維持していくのかという問題もあります。

コロナ禍でテレワークが進んだとはいえ、やはり渋谷に通う人たちがいらっしやるので、彼らが災害によって帰宅困難者になった場合の危機管理はどうするのか。そうした帰宅困難者を渋谷の施設がどう受け容れていくのか。そこにコロナ禍では「密」を避けるための分散避難も指摘されており、分散避難先の一つとして渋谷の社寺や教会といった宗教施設はどのように関わっていくのか、という課題も残されています。

コロナ後の渋谷の展望という意味では、変わり続ける渋谷の背景にある非合理性や、変わりにくい要素は何らかの形で可変的に維持され、そこに宗教文化も介在していくのかもしれない。高久先生の指摘にもありましたように、おそらくリアルとICTを活用したつながりの共存やせめぎ合い、あるいは併存状況が生まれるのかもしれない。渋谷の場合はIT企業さんが多く、テレワークがかなり進んでいるところもありますので、渋谷に来て丸一日仕事をしている、いわば「全日制」の企業人から、ルーティンワーク以外の打ち合わせなどで週一回や二週間に一回といった形で渋谷のオフィスに出て来るような、いわば「通信制」の企業人たちへシフトしていることも考えられ、こうした人たちとコミュニティの接点をどのようにつくっていくのか。また、再開発後の桜丘のように、新たな居住空間ができた場合、それまでの住民とのつながりはどのようになっていくでしょうか。タワーマンションが建設され、新しい住民が増えた中央区日本橋エリアでは、神田祭において子ども神輿や山車に新しい住民が親子で二〇〇人ぐらいが参加していますが、これは地域外から訪れた観客をほとんど見ることができない祭り、いわば「観客の見えない祭り」となっています。もしかしたら渋谷でも「観客の見えない祭り」が形成されていくのかもしれない。そうした多様なアクター、新しい住民と古くからの住民との接点をつくるためには、それに熱心な個人の活躍、つまり人的要因や、神輿や山車といった「結集のための核」の存在も重要になってくるといえるのではないのでしょうか。以上の課題をまとめると、「渋谷を構成する多様な構成員をどのようにつないでいくのか」、あるいは「どのような接点を形成する必

要があるのか」が大きな課題だと考えています。

【林】どうもありがとうございました。最後の三つ目の質問に入らせていただきます。

質問③ 渋谷学から学んだこと 渋谷学の課題と展望について

伊藤先生からの質問ですが、一つ目は渋谷学二〇年の経験から、皆さんがそれぞれの専門分野に戻ったときに、何か変わったことがありましたかということです。二つ目の質問は、今後の渋谷学について、何を新たな重要な課題として取り組んでいくべきか、あるいは組織としてはどのようにしていくべきなのかということです。これらについて、まず手塚先生から簡単にお答えくださいますようお願いします。

【手塚】私が渋谷学に関わったのは一五年くらいだと思いますが、その中での経験を踏まえて申し上げます。

まず何よりも、自分の研究の幅が広がる。もちろんお二人だけではありませんが、本日の秋野先生、高久先生とは、もう一〇年以上のお付き合いになります。違う分野の方と多様な方法論で渋谷に迫るような機会があつて、他の方法論の学びになりました。それは、自分の研究の幅を広げることにつながつたと思つております。

私の専門は日本の政党政治の歴史で、特に政党政治家が何に支えられているのか、その支持基盤とはどういうものなのかを研究しています。研究を進める中で、仏教界との関わりを強く持つていて、なおかつ民俗学で扱われる無尽や講といわれる組織を自分の個人後援会に組み入れて活動している政治家がいました。もし渋谷学に関わっていなければ、仏教界との関わりや無尽、講を自分の支持基盤に入れていることの意味はちょっと私にはわからなかったので

はないかなと思います。そういったことを扱って論文を書こうと思ったのは、間違いない渋谷学に関わっていたことのおかげだと思っています。

そのことが持つ意味ですが、他の政治史研究者、特に政治学の立場から政治史に取り組む研究者からは、政治学、社会科学の分野においては、自分の分析した事例を一般化することを強く求められるようになっていっていると聞きます。もちろん、歴史学でも一般化が求められないわけではありませんが、事例の面白さだけでも許される面があると思います。ただ、強く一般化が求められると、民俗学、宗教学など他分野の視点を取り入れた上で、興味深い事例を一般化できるレベルまで持つて行くのは容易ではないのかもしれないと思ったことがあります。なので、渋谷学に関わりながら自分の研究を進めることは、自分の研究の幅を広げることだけでなく、政治学系の政治史研究では扱いにくい視角や題材を取り込み研究することを通じて、結果として政治史の幅を広げることにも寄与しているのではないかと勝手に自負しております。私が書いた論文「戦時期における衆議院議員の活動と支持基盤—翼賛選挙非推薦議員安藤正純と無尽・仏教界を中心に—」（『國學院雑誌』第一一九巻第一号、國學院大學、平成三〇（二〇一八）年）は、本学図書館のリポジトリから閲覧できますので、ご関心のある方は見ていただければと思います。

それと、今後の渋谷学がどうなるかということですが、どのようにして多くの人に関わってもらえるようやっていくのが課題です。上山先生、倉石先生や渋谷学が始まった頃に関わられていた先生方が、徐々に大学を去られている。他方、渋谷に関心を持っている先生はまだたくさんいるはずで、新学部（観光まちづくり学部、二〇二二〔令和四〕年開設）にもきつといらっしゃるわけです。そういった先生とも一緒にやっていくことが重要なかなと思います。では、そのときに誰がオーガナイザーをやるのかというもう一つの大きな問題がありますが、それは今後何らかの形で解決されるのではないかなと思います。以上です。

【林】ありがとうございます。続きまして、高久先生お願いいたします。

【高久】今、手塚先生がいつてくださったように、正直本当に渋谷学に関わっていないければ——学際的な研究をしていなければ——秋野先生や手塚先生とお会いすることはなかったわけですから、そういう意味でいろいろな方法論があることを学ばせていただき、自分の研究者としての幅は本当に広がったなということをまずはお伝えします。

結局のところ、渋谷の民俗を把握するためには、村落調査とは別の方法を取らなくてはなりませんでした。民俗学では伝承者を集団的にとらえることを前提としています。しかし、渋谷を見ていくにはそれだけでは不十分でした。集団というのは、個々がたくさん集まって形成されるものです。渋谷学を通じて伝承に関わる個の存在を私の研究の中ですごく考えました。

実は私、民俗芸能の研究者でありまして、芸能に渋谷学で培った知見を置き換えていく作業をずっとしています。集団ではなく個人の存在や役割が、どのように芸能の伝承に関わっているのかということへ関心を持つことができたのは渋谷学のおかげでして、今でもその関心事を元に研究をしております（高久舞「伝承キーパーソンと祭囃子—東京都大田区、神奈川県川崎市を中心に—」『國學院雑誌』第一一八巻第四号、國學院大學、二〇一七〔平成二九〕年など）。つまり、個人、個々というものと、集団的なものがどう関わっているのか、もしくは非常に個性的なものと、個性が消えている共同的なものがどのように関係しているのかを捉えることができたのは、渋谷学から還元されたことだと思っています。

渋谷学の今後の展開についてですが、私は渋谷のイメージと現実がどんどん乖離していくのではないかと考えていますので、これまで以上に多角的な研究が必要になると思います。橋元先生からのコメントにもあったように、通時的・歴史的な変遷という点は、実はある程度は見えてきていて、それぞれの学問分野でやってきたことが、このシン

ポジウムも含めて見えてきているのではないかと思います。

渋谷学の良さは、様々な専門分野で研究を行なっていることです。専門分野ごとの成果は出ていますが、まだ真の学際的研究にはなっていないと思っています。渋谷という地域を共通事項として各分野で研究を重ねてきましたが、今後、学際的研究を発展させるためには、ある特定の時代を共通事項とした上で、その時代に起きている現象や構造を探究する共時的研究を学際的に行なっていくことも一つの方法ではないかと思っています。

【林】ありがとうございます。続きまして、秋野先生お願いいたします。

【秋野】自分の学へのフィードバックについては、自分の恩師（大学院の指導教員）が石井研士先生という宗教社会学の先生で『渋谷学叢書3』の編著者として、先生が銀座の宗教調査（石井研士「銀座の神々―都市に溶け込む宗教―」新曜社、一九九四〔平成六〕年）で驚いたように、私の場合は渋谷のビルの屋上に祀られた小祠（小さな神社）に出合って、「ああ、こんなところにお稲荷さん（稲荷神社）があるんだ」と驚き、なかには意外と新しく創建されたものもあり、そういう体験を持てたことが大きかったわけです。渋谷に出合うまでは、たとえば、山・里・海といった日本の伝統的な風土・景観が一つのエリアに凝縮されている千葉県館山市の神社祭礼を対象に、地域社会と神社祭礼の関係について調査研究をしていました。そうしたなかで、都市を対象にしようと思ったのは、まさに渋谷学で渋谷を対象とした研究（その契機となる石井研士先生の大学院・宗教学ゼミナールの渋谷調査）に携わったからであり、そこでの経験を活かして東京の神田祭の調査研究を行ない、その経験を持って再び渋谷に戻ってきたという現状にあります。

それから、手塚先生や高久先生と同様に、隣接する領域の様々な研究者と学際的な研究に携わり、自分が専攻する

学問のオリジナリティとは何なのかということを人よりも問われることが多かったのではなかったかと思います。説明する必要性といいますが、何のために研究をしているのかについて、少しはそれが見えてきた感じがします。

具体的にいえば、第一部の報告（秋野淳一「宗教から見た渋谷」『別冊ブックレット渋谷学』國學院大學研究開発推進センター、二〇二二（令和三）年参照）で紹介し、第一部で伊藤先生がコメントの中で取り上げていただきましたけれども、宗教をどう捉えるかということです。信者の集団が宗教であるとする「実体的定義」とともに「機能的定義」――何か特定の機能を持つものを宗教と定義し、教会や教団に限らず、社会の様々な領域に宗教的なものを見出そうとするもの（岡本亮輔『聖地巡礼―世界遺産からアニメの舞台まで』（中公新書）中央公論新社、二〇一五（平成二七）年）――があります。私の場合は、どちらかというとな機能的な側面を重視して渋谷の調査研究を行なってきた中で、改めて渋谷の動態を見ると、オウム真理教や法の華三法行など、重大な事件を起こしたような教団の施設が存在しました。孤独で行き場のない若者の受け皿としての宗教という、実体的な側面をもう一度見直すべきかもしれません。

つまり、渋谷の調査研究から「実体的定義と機能的定義の両面を念頭に置いた宗教現象の動態を切り口とした社会研究・文化研究」へ展開できる宗教社会学の強みに気がついたということになります。これについては黒崎浩行先生「渋谷の防災・減災と宗教文化」（前掲『渋谷学叢書』⁵ 渋谷にぎわい空間を科学する）。のちに、黒崎浩行『神道文化の現代的役割―地域再生・メディア・災害復興―』弘文堂、二〇一九（令和元）年に収録）がまさに宗教施設と宗教文化の両面を念頭に、渋谷の防災・減災に果たす地域資源の役割を明らかにしています。こうした宗教を総合的に捉える動態的な研究にシフトしていくべきではないかと感じています。

ところで、宗教学・宗教社会学の地域研究（エリアスタディ）には、渋谷以外では、たとえば、東京の銀座（前掲『銀座の神々』）もそうですし、大阪の梅田（石井研士・村上興匡・奥山倫明・福島信吉「大阪市北区梅田の宗教調査」『東京大学

宗教学年報』第五号、東京大学宗教学研究室、一九八七（昭和六二）年、石井研士・村上興匡・奥山倫明「大阪市北区梅田の宗教調査2」『東京大学宗教学年報』第六号、東京大学宗教学研究室、一九八八（昭和六三）年）や静岡県浜松市（田丸徳善編『都市社会の宗教―浜松市における宗教変動の諸相―』東京大学宗教学研究室、一九八一（昭和五六）年、同『続 都市社会の宗教』東京大学宗教学研究室、一九八四（昭和五九）年）、奈良県の生駒市（宗教社会学の会編『生駒の神々―現代都市の民俗宗教―』創元社、一九八五（昭和六〇）年、同『聖地再訪 生駒の神々―変わりゆく大都市近郊の民俗宗教―』創元社、二〇一二（平成二四）年）、山梨県の丹波山村（柳川啓一監修『村の宗教―丹波山村調査報告書―』東京大学宗教学研究室、一九八六（昭和六一）年）、北海道の常呂町（柳川啓一・中牧弘允「宗教変動の解釈をめぐって―北海道常呂町の宗教と社会―」『思想』第五九一号、岩波書店、一九七三（昭和四八）年）、ハワイ（柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系宗教の展開と現況―ハワイ日系人宗教調査中間報告―』東京大学宗教学研究室、一九七九（昭和五四）年、柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系人社会と日本宗教―ハワイ日系人宗教調査報告書―』東京大学宗教学研究室、一九八一（昭和五六）年）といった先行研究があります。そうした研究成果を今一度参照し、ヒントとなるべき視点などを確認する必要があります。また、自身の都市祭りを対象とした研究成果からは、その動態を捉える上で、たとえば、民俗学の矢島妙子先生が明らかにしているように、よさこいソーランの中からよさこいソーラン神社が生まれたように、「イベントから祭りへの変化」（イベントの祭り化）、反対に「祭りからイベントへの変化」（祭りのイベント化）、あるいは高久先生が指摘する「伝承キーパーソン」に架橋できる個人の活躍（人的要因）にも留意する必要があります。世界の宗教の歴史を振り返ってみれば、ユダヤ教徒のイエスがキリスト教を開き、戒律や儀礼にとらわれない救済宗教が誕生したように、動態的な捉え方が非常に大事だといえます。機能的な側面と実体的な側面の両面を見るというのは、やはり渋谷学から学んだのかなと思っています。こうした各専門領域へのフィードバックがあれば、渋谷学が〈学〉として成り立つ第一条件はクリアできるのではないかと思います。

それから、研究組織として何をするかというのですが、これについては二つの可能性をお示ししたいと思います。

渋谷は、本日ご参会の先生方のご意見とも共通するように、重層的・複合的で多様性を持つ現代社会を象徴するような都市であり、その渋谷を調査研究の対象として、渋谷を形成する多様な構成要素の相互関係を研究する意義が「渋谷学」にはあるのではないかと考えられます。こうした渋谷の特徴を踏まえ、一つ目の可能性としては、これまでの渋谷学の蓄積をベースに、より学際的な共同研究を主とした文化形成・変容に関する研究に展開していくことが考えられます。それは、橋元先生が行なってくださったように、通時的であれ、共時的であれ、渋谷という都市の実態を、たとえば、「渋谷文化モデル」として図式化していく必要があると思います。図式化によって渋谷以外の都市との比較研究や理論化の糸口になると考えるからです。もちろん、それは国内に限らず、そうした成果を学術的に翻訳して、国際発信していくことも重要だと思います。

二つ目の可能性としては、渋谷を対象とした地域連携・社会貢献を主としたもので、ここには国際貢献ということも含まれると思いますが、気候変動の時代においては持続可能性、今でいうSDGs (Sustainable Development Goals)・持続可能な開発目標)につながるような研究をも考える必要があるのかもしれない。こうした研究を進めていく際、第一に、「渋谷は誰によって支えられ、形成されているのか」を可視化します。第二に、「渋谷を形成する多様な人々はいつ、何によって、どのような関係性を持っているのか。そこに文化的な要素はどのように介在しているのか」を明らかにし、この第一と第二の結果を踏まえて、「渋谷文化モデル」を図式化する。第三に、この「渋谷文化モデル」をベースに、「渋谷を形成する多様な人々をつなぐ機会・場および文化的な要素は、どのように環境や社会、経済と関わっているのか、あるいは関わるべきなのか」を明らかにします。第四に、第三の検討結果を踏まえて、「渋谷文化モデル」を「持続可能な渋谷文化モデル」として再構成し、これを国内外へ発信していきます。この地域連携・

社会貢献を主とした研究活動を展開し、図式化を図っていく場合には、國學院大學の学部や大学院のゼミ、教職員、学生さんなどと連動しながら、実際の渋谷の地域社会へのアクションリサーチ、企業や行政などへの学生さんのインターンシップを通じて参与しながら、そうした蓄積をも加味した現実的なモデルを探っていく必要があるでしょう。ここまでいくと、國學院大學に「渋谷学」を専任とする教職員を置いた方がより研究教育の効果が高まるのではないかと考えられます。

【林】ありがとうございます。本日、コメンテーターとしてご登壇いただきました、伊藤先生と橋元先生から、報告者の三先生の答えに対して何か追加のご意見、あるいはご指摘がありましたらお願いしたいと思います。まず、伊藤先生からご発言をお願いいたします。

【伊藤】今日は、大変充実したディスカッションになったと思います。私からは、かなり無茶ぶりに近いような質問を出させていただいたのですが、きちんと皆さんに答えていただいて、ありがとうございます。その答えには、ご自分の専門家としての領分を超えた発言が含まれていたことに大きな感銘を受けました。渋谷学は完成した学問体系ではなく、つねに生成していく、ダイナミズムの中の学問であるとするならば、三人の皆さまのコメントに横溢する挑戦的な精神、あるいは「勇氣」のようなものの中に、渋谷学の明るい将来を垣間見たような気がします。

私がこのシンポジウムに参加させていただいて、何よりも大きな成果は、上山先生がおつくりになった渋谷学の学際的な環境の中で育った学生さんたちが教職員に就いて、中堅を担えるようになった。今日はその三人の若い中堅の研究者のいわばデビューということになります。この三人の方のしっかりされた発表や将来展望を聞いて、これから

先の渋谷学が安泰だろうということを確信いたしました。これが本日の最大の成果ということが出来ます。彼ら三人こそが渋谷学の成果そのものだといえるでしょう。上山先生も安心して引退できるのではないかなと思った次第です（笑）。どうもお疲れさまでした。

【林】 どうもありがとうございます。続いて、橋元先生からご発言をお願いいたします。

【橋元】 私も三人のお話を聞いて大変嬉しく、楽しく聞かせていただきました。これからの渋谷学をしつかりと担っていただけと感じましたし、重要な問題を提起してくださったことを本当に嬉しく思いながら聞きました。

その中で思ったことを、一、二点述べさせていただきます。郷土史家などがそれぞれ特徴ある地元を一生懸命研究するということはよくあることだと思いますし、それぞれ貴重な研究だと思うのですが、あえて「渋谷学」と名づけて明らかにするべきことは何であるのかということ意識しながら、これまでの成果をまとめる方向でやってくださると、それぞれの分野のやるべきこともより見えてくるのかなとも思いました。

そして、広場の役割とか、あるいは若者の文化、あるいは若者の居場所といった重要な論点が提起されており、その分析において渋谷学として明らかにしなければいけないものは何であるのか、というあたりを意識していただけると、本当に深い「渋谷とは何ぞや」という問いへの答えも見えてくるのかなという気がいたします。

それと同時に、今後の多様化がどのように進んでいくのか。渋谷は、「若者の街」であり、「大人の街」でもあり、多様な人たちが集えるまちになることを目指しているわけですが、行政は「ちがいをちからに変える街」（渋谷区基本構想、<https://www.city.shibuya.tokyo.jp/kusei/shisaku/koso/index.html>）とか、あるいは混ざり合って生まれてくる新し

い価値を生み出すとおっしゃっています。それぞれの層がそれぞれの場所にゾーニングされた集合体としての渋谷ではなく、まさに混じり合って新しい価値を生み出せるのかどうか。その壮大な実験にこれから取り組むことを通じて、新しい何らかの価値を生み出せるかどうか。もし、そうした新たな動きが見られるとしたら、やはり渋谷学でなければいけないなど非常に強く感じます。そうであれば、私ももうちょっと頑張って渋谷学で何らかの貢献ができればいいと思います。

伊藤先生もそうですし、上山先生もそうですが、もう引退されるかのようなことはおっしゃらないで、引き続き頑張って我々と一緒にいろいろ研究してくださいをお願いします。昨日、解散から四〇年後の七〇歳を過ぎたA B B A（スウェーデンのポップ・グループ）が再結成されたこと（二〇二一年九月三日）を聞いて、私は非常に嬉しく思いながら、渋谷学についてもまだまだいろいろな貢献を年長の先生方にもしていただきたいなど願って、私の最後のコメントにしたいと思います。どうもありがとうございました。

【林】橋元先生、渋谷学に対するエールもいただきありがとうございました。

最後の最後に、上山先生に今日の登壇者のご発言と、伊藤先生と橋元先生のご意見を合わせて、まとめのご発言をよろしくお願いいたします。

【上山】お三方のお話は、すでに論文（『別冊ブックレット渋谷学』第一部 論考編）でおおよそ承知していましたが、今日のお話を聞いて、またそれに対するお二方のコメントも拝聴いたしました。大変心強く思いました。その内の橋元先生は、当初からきっちり役割を担っていただいて、しかもいうことはきちんとおっしゃっていただいて、私は幾

度か「上山にはそもそも論がない」というような批判を受けながら、付き合って参りました。とはいえ、きちんと事はやっていただけてきた。倉石先生やそれ以外の方々に今回の状況をご報告いたしたいと思っております。本当に安心して後を任せるといって、橋元先生からまた叱られますけれども、そのような状況であるということを改めて感じました。本当にありがとうございました。

【林】 上山先生、まとめのご発言をありがとうございました。まだまだ討論すべきことはたくさんあると思いますが、すでに時間も尽きましたので、ここでディスカッションを終了させていただきます。本日はお忙しい中、オンライン渋谷学シンポジウムにご参加いただきありがとうございました。

【追記】

本記録は、國學院大學研究開発推進センター「(SDGs)と建学の精神」研究事業(研究代表・松本久史國學院大學教授)の成果の一部である。